

在家仏教講演会 開催ご案内

- 東京 第2・第4土曜日 午前10時～11時30分
 会場：中野サンプラザ7階研修室10（中野区中野4-1-1）
 清風クラブ2階研修室（渋谷区上原3-32-6）
 会場整理費：700円 問合せ：03-3465-0671
- 6月10日 「そのままのあなたからはじめる『修証義』入門～生死の問いを31節に学ぶ」
 大童法慧 先生 曹洞宗徳成寺副住職 [清風クラブ]
 1969年山口県徳山市生まれ。龍谷大学仏教学部卒業
 福井県仏国寺の原田湛玄老師のもとで修行
 2009年から2014年まで大本山總持寺役寮をつとめる
- 6月24日 「漱石と仏教—自己本位と則天去私をめぐって」 [清風クラブ]
 今西順吉 先生 北海道大学名誉教授
 東京都生まれ。東京大学文学部印度哲学梵文学科卒業
 ドイツ・ゲッティンゲン大学を経て、北海道大学文学部教授
 国際仏教学大学院大学教授・学長を歴任
 インド哲学仏教史、夏目漱石や森鷗外などに対するサーンキヤ哲学の影響を研究
- 大阪 第3金曜日 午後3時～4時30分
 会場：堂島アバンザ14階（北区堂島1-6-20）
 会場整理費：500円 問合せ：06-6346-7000
- 6月16日 「わたしのいのちと宇宙」
 幹 栄盛 先生 天台宗鶴林寺長老
 1938年生まれ。龍谷大学卒業
 鶴林寺は聖徳太子建創と伝えられ、国宝の本堂や太子堂をはじめ、国や県および市指定の文化財を多数保有し「播磨の法隆寺」と呼ばれる名刹。
- 名古屋 第3水曜日 午後1時30分～3時
 会場：いちご丸の内ビル9階（中区丸の内3-17-13）
 会場整理費：500円 問合せ：052-962-4181
- 6月21日 「インドに発生して各地に伝播した仏教ジャータカ物語」
 田辺和子 先生 愛知学院大学講師
 東京大学文学部印度哲学科卒業
 東京大学大学院人文科学研究科印度哲学専攻博士課程満期退学
 博士（文学、愛知学院大学）
 パーリ聖典に見られる物語文学、仏教聖典の過去世物語、仏教文学、カンボジア・タイ国の仏教



いのち尊し

父からの最後の贈り物

加藤俊二

（在家仏教協会副理事長）

第2号
 いのち尊し
 平成29年6月10日
 一般社団法人 在家仏教協会
 〒151-0064 東京都渋谷区上原3-32-6
 TEL 03-3465-0671
 FAX 03-3465-0672

私の家の食卓の壁に四方五十七センチほどの小さな額が掛かっています。父・加藤辨三郎直筆の七文字の言葉です。「生かされている」。

他界寸前に残した遺言です。私と家内は毎日の食事時にその七文字を見て、各々の捉え方を実生活の体験に合わせて考えるようにして来ました。父の没後三十年余が経過し、私も八十六歳になります。いまだに「自我」「我欲」の芽が吹き出して行く先ががすむのですが、時折「いや、待てよ」という音も響くようになりました。

* ある日、高校生の孫が食事中に七文字を見ながら、意味が分からない、と言います。学校の先生は「自分として強く生きよ」「他に染まらず自分を生きなさい」とおっしゃるが、どちらが本当か、と。

仏陀の教えを高校生に説くことは私には難しいのですが、自分ながらこんな説明をしました。

食卓の上にあるお刺し身と果物を見てごらん。自分の空腹を満たすために平気で食べているよね。この鯛（たい）と鮪（まぐろ）も大海にあつて幸福な一生を平和な海で暮らしたかったのだが、可哀想に僕たちの食前に運ばれたのだよ。果物も甘い実を鳥に与えてその種を子孫のために運んで貰うために実っていたのを、僕たちの食卓に運ばれたのだよ。

僕たちは感謝の気持ちもなく食べてしまった。少なくとも「すみません」「ありがとう」と言ってお手合わせてから食べようね。そのことに気が付けば、身の回りのものは皆感謝の対象になり、「生かされている」の意味も分かっ

くるよね。その心が芽生えれば自分として強く生きて行く事ができるのだと認識する日が来る、と願いながら食事を終えました。

*

実は、私も「生かされている感謝」への教訓をいただきました。昨年二月に肺癌の手術をして右肺半分を失ったのです。その六カ月後には突発性大動脈解離を起こして意識不明となり、救急車で病院に運ばれました。応急処置後、出張中の血管外科の先生を電話で呼び出してくれたのです。タクシーで駆け戻って翌日の昼までかけて手術をしてくれました。もちろん本人は知る由もありません。

家内は手術前に執刀の先生に呼ばれ、「覚悟をして下さい」と言われたそうです。意識を取り戻したのが丸一日後でした。腹部に三本のチューブと腕に二本の点滴針が入れられていました。手術後、先生はベッドに來られても寡黙で、静かに見守っておられるようでした。ところが一週間後、ベッドに來られた先生は病状の事にはふれ

ずにこう言われたのです。「加藤さん、加藤さんは今新しい命をいただいたのです。まず奥様に救われ、救急車の皆様に支えられ、緊急外来の医者と看護師に手当を受け、そのほか、いろいろと支えられて救われたのですよ。その一つでも欠けていれば、私の手術は成功しませんでした」

*

入院は二カ月にわたり、不自由の身である「自分」をさらに考える時間をいただきました。父の残した七文字についても考えました。在家仏教協会にお世話になった日々

の思い出も追いました。歩行も難しい状態ですが、家にいる時間がいただけで「在家仏教」誌のバックナンバーを一冊ずつ読み返す機会もできました。掲載された先生方のご講話を読む喜びもいただきました。大病のお陰で先生方にもう一度お会いできたのです。感謝の毎日です。「生かされて命をいただく毎日」です。

宗教歌人―岸上たえ

光畑浩治

(NPO法人豊津小笠原協会理事)

高知県安芸市生まれの岸上たえ（一九二四〜一九九六）は病に冒されながらも宗教歌人として、いい師に出遭い「癒ゆるかと思う日のあり寝つくかと思う日のありナムアミダブツ」の「念佛」の中、歌集『白い道』を刊行。彼女は戦後すぐ結核、暫くして乳癌、後、副腎摘出、足の骨も胸の乳房も鎖骨も助骨も失った。が、若い頃、神戸の塩尻公明先生や東京の加藤辨三郎先生などの出遭いがあった。歌は父、母、師を詠み、仏と人と病と命を詠んで「わが一生泣

くも笑ふもそのまんまただみ佛のお莊嚴かな」の日々だった。

*

求道に一生を果てし父の苦惱地に知るはわれ一人のみ
父の願わが血となりてめぐりつつ
尽きぬ佛の道を求むる
老い惚けて無為なる母に残りし
は感謝と人を讃ふる言葉
明日は師にまみゆる日ぞと思ふ
時しみじみ力湧く思ひあり
名号におん掌を合わす師の君の
背あたたかくやさしくおわす
「本願を信じ念佛申さば佛となる」
唯それだけと師は説き給う
「力なくして終わるときに彼の
土へ参るべきなり」この度病みて
嬉しき御言
転移せる癌は術なし副腎を取り
て病勢抑へんといふ

在家仏教協会 四つの信条

- 一、釈尊の説法虚言ならずと信じていること。
- 二、釈尊の説法の内容そのものは永遠の真理であるが、それを大衆に知らせる手段は、時と処と人に応じつねに新鮮でなければならぬと信じていること。
- 三、呪術らしきものは一切排除すること。
- 四、在家生活のまま仏教に生きようとしていること。

仏教と私

新幹線での出会い

相羽 顕

(会社役員 五七歳)

私は三十三歳まで、十年間、協和発酵工業株式会社に勤めていました。

私の母は、熱心な仏教信者でした。私が大学四年の時、仙台で在家仏教協会創立者・加藤辨三郎先生の仏教講演を、母とともに拝聴する機会に恵まれました。今でも頭に残っているのは、先生の「私の夢は、ガンをこの世から失くすことです」というお言葉でした。当時、青雲の志に燃えていた私の胸に、そのお言葉が強烈に響きました。

そして、偶然にも、東京へ帰る新幹線の車中で、加藤先生と一緒にになりました。先生が車中を移動された時、私は声をお掛け致しました。「是非、先生の下で働かせて下さい」とお伝えしました。そのころ、皆様もご承知の通り、先生は協和発酵の会長を務められていました。そして、先生は私の声

はらいてもはらいても死にたくなき思ひ奇跡などなしと自らに言ひ聞かす

わが病は如来を慕ふ縁なり病を菩薩といただき行かむ
分からは分からはぬでよしまるまるのお慈悲の中にありと思へば

病みながら今が一番幸せと思はせらるることの尊さ
生かさるる身は病むこともおまかせのままと思えば安けきものを

わが病を哀れと嘆きたまひたる幾人かすでにこの世に在さず
地に這ひし身をあざやかに転じたる蝶々々と彼方に消えぬ
いのちよりのちは生まれ人は人花は花なる光を放つ

「あ」と言えば「ん」と応へる夫在りてわが骨折も笑ひで暮れる
一生かけて会はねばならぬ私に出会ひたる時私はなし

*

彼女は「歩みゆく道は涯なしその彼方見えねど念佛に導かれゆく」いのちを詠った。

「田舎日記シリーズ」より

在家仏教通信

入会のご案内

協会では会員を募集しております。私どもは、皆様の会費と寄付によって活動しております。協会の発展のためにご協力を宜しくお願い致します。

- 年会費 賛助会員 一万七千円（一口） 正会員 八千円

■月刊誌「大法輪」を毎月お届けいたします

在家仏教講演会の筆録が掲載中

■機関紙「いのち尊し」を毎月お届けいたします

■講演会の動画を視聴出来ます

東京会場を中心に三十本配信中心

■協会六十周年記念誌

『「講演集」悲喜をよろこぶ』

『「対談集」掌を合わせて生きる』

を呈呈します

「いのち尊し」投稿規程

◇随想「仏教と私」（八百字以内）
人生を振り返って仏教と出逢ったときの感動などをお書きください。

◇コラム「この一冊」（六百字以内）
感銘を受けた書籍を紹介してください。新刊だけでなく、思い出の本も歓迎します。著者名、出版社名、発行年を忘れずに。

*

原稿用紙またはメールに添付して、左記宛てにお送りください。住所、氏名、電話番号、できれば職業と年齢もお書きください。読みやすくするために、あるいは編集上の都合で、趣旨を変えない範囲で削ったり直したりする場合があります。採用文には薄謝をお送りします。また、不採用の原稿はお返ししませんのでコピーを手元に残してください。

原稿の送り先は〒151-0064 東京都渋谷区上原3-32-16 在家仏教協会「いのち尊し」係。メールは info@zaibukukyo.com

新機関紙「いのち尊し」発行

在家仏教協会の機関誌「在家仏教」はこの5月号をもって休刊となりました。代わって、会員相互の交流を目指す機関紙「いのち尊し」を毎月初めに発行します。会員のみなさまに郵便でお送りするほか、講演会の会場でもお配りする予定です。

みなさまのご寄稿もお待ちしております。別掲の投稿規定をご覧ください。なお、題字「いのち尊し」は当協会の創立者・加藤辨三郎の筆によるものです。

協会ホームページが新しくなりました

■最新情報の新設

■加藤辨三郎のページの新設

加藤辨三郎の著作やエッセイをお届けします。

■在家佛教アーカイブスの新設

「在家佛教」バックナンバーより、講演会のテーマに関連した記事や講師の先生方の過去の講演録を掲載します。

